

---

# スクールボランティアサミット 2012

---

2012年8月11日（土）



特定非営利活動法人

**さわやか青少年センター**

# 目 次

	頁
1. スクールボランティアサミット 2012 チラシ (趣旨・プログラム等).....	1
2. スクールボランティアサミット 2012 風景.....	2
3. 普通科分科会 (まとめ).....	5
4. 専門分科会 (まとめ) .....	10
5. 基調講演 ー高校時代の人間形成ー 公益財団法人さわやか福祉財団理事長 堀田 力氏.....	13
6. 全体会 (パネルディスカッションー地域を巻き込むー).....	23

普通分科会、専門学科分科会の発表者 6 人の資料、及び、当日参加した高等学校の先生から提供された資料については、さわやか青少年センターのホームページに掲載していますので、ご覧下さい。(ダウンロードも可能です)

さわやか青少年センターホームページ ( URL : <http://www.ssc-npo.or.jp> )

# スクールボランティアサミット 2012 開催要項

— 人と係わる、地域と係わる —

## 【趣 旨】

現在、高等学校における奉仕、ボランティア体験学習は自然環境、社会環境の劇的変化による社会的なニーズの高まりとともに、社会人として必要な資質である人間力（自助力と共助力）を伸ばすために、高校生にとって欠くことのできないものとなっています。

しかし、高等学校における奉仕、ボランティア体験学習は各学校によって、取り組み内容の充実度が異なるのが現状です。そこで、高等学校全体としての質的充実を図るとともに、奉仕、ボランティア体験学習情報の共有化、ネットワーク化を図ることを目的に、教師相互の研修会として「スクールボランティアサミット」を開催します。

**【主 催】** 特定非営利活動法人さわやか青少年センター  
 （公益財団法人さわやか福祉財団委託事業）  
 東京都奉仕研究会  
 （東京都教職員研修センターから教育研究普及事業の  
 支援対象研究団体として認定された研究会です）

**【会 場】** 東京都立芦花高等学校  
 〒157-0063 東京都世田谷区粕谷 3-8-1

**【開催日時】** 平成 24 年 8 月 11 日（土）  
 午前 10 時～午後 4 時

**【対 象】** 高等学校の教職員、指導主事、協力団体関係者等

**【参加費】** 無料 但し、資料代 1,000 円

**【参加人数】** 100 名

**【申込期限】** 8 月 9 日（木）まで

**【申 込 先】** 都立高校関係者：東京都奉仕研究会（都立学校教員は「研修出張」可）  
 都立高校関係者以外：さわやか青少年センター ※裏面 FAX 申込書あり

## 【プログラム】

AM 9:30 開場（受付）

10:00 分科会（事例報告・研究協議）  
 （普通科分科会）

- ・群馬県立尾瀬高等学校
- ・岡山県立林野高等学校
- ・東京都立練馬高等学校

（専門学科分科会）

- ・愛知県立豊橋工業高等学校
- ・東京都立五日市高等学校（定時制課程）
- ・東京都立第五商業高等学校

PM 12:00 分科会終了（休憩・昼食・資料公開）

1:30 基調講演 — 高校時代の人間形成 —  
 公益財団法人さわやか福祉財団  
 理事長 堀田 力氏

2:30 全体会（パネルディスカッション—地域を巻き込む—）  
 コーディネーター・講評  
 常磐大学コミュニティ振興学部  
 教授 池田 幸也氏

4:00 閉会

**連絡事項 1)** 高等学校の奉仕、ボランティア体験学習実施校の先生方は、年間指導計画・単元の指導案等（コピー50部をご準備ください。）を当日持参、もしくはご送付ください。（参加申込時に確認）休憩・昼食時、公開し自由にお持ち帰りいただきます。

**2)** 昼食について

会場校近辺は住宅街のため、飲食店等がありません。  
 （千歳烏山駅付近には飲食店があります。）

弁当をご希望される方は、参加申込み時にお申込みください。

**【問い合わせ】**（申込みは、裏面 FAX 用紙にて FAX でお願いいたします。）



(URL)<http://www.roka-h.metro.tokyo.jp/cms/html/entry/31/3.html>

京王線 千歳烏山駅下車、東口より徒歩約 13 分  
 小田急線 成城学園前駅よりバス約 12 分  
 （千歳船橋駅行）千歳中学校前下車徒歩 2 分  
 小田急線 成城学園前駅よりバス約 12 分  
 （千歳烏山駅南口行）榎北下車徒歩 2 分  
 小田急線 千歳船橋駅より小田急バス約 7 分  
 （成城学園前行）千歳中学校前下車徒歩 2 分  
 京王線 千歳船橋駅より京王バス約 7 分（千歳烏山行）  
 芦花高校入口下車徒歩 4 分  
 小田急線 祖師ヶ谷大蔵駅より 徒歩約 20 分



堀田 力氏  
 教育課程審議会委員、次世代の教育を考える懇談会委員、超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会委員など委員歴任



池田 幸也氏  
 小・中・高等学校教員、常磐大学助教授を経て、04年より現職。専門：教育学・教育社会学（ボランティア学習論）。日本福祉教育・ボランティア学習学会常任理事／日本ボランティア学習協会理事等歴任

**【都立高校関係者】**（都立学校教員は「研修出張」可）  
 東京都立芦花高等学校 奉仕研究会 会長柳久美子宛  
 〒157-0063  
 東京都世田谷区粕谷 3-8-1  
 TEL: 03-5315-3322  
 FAX: 03-3305-8180

**【都立高校関係者以外】**

〒105-0011  
 東京都港区芝公園 2-6-8 日本女子会館 7 階  
 特定非営利活動法人さわやか青少年センター分室  
 TEL03-6809-2795 FAX03-6809-2796  
<http://www.ssc-npo.or.jp> E-mail: info@ssc-npo.or.jp



特定非営利活動法人  
**さわやか  
 青少年センター**

# スクールボランティアサミット 2012 (8月11日)

普通科分科会風景 (AM10:00~12:00)



専門学科分科会風景 (AM10:00~12:00)





全体会(パネルディスカッション：地域を巻き込む)

(PM2:40~4:00)



参加状況：参加総数 53 人（大人 40 人）

1	高等学校	19 校
2	中学校	2 校
3	小学校	1 校
4	特別支援学校	2 校
5	大学	2 校
6	文部科学省	1
	教育委員会	2
	(学校関係団体)	29
7	財団	1
8	NPO 法人	3
9	個人ボランティア	12



# スクールボランティアサミット 2012

## 普通科分科会（まとめ）

### 1. 活動報告

#### (1) 岡山県立林野高等学校（香山 真一先生）

##### 「ボランティア・社会貢献活動につながる取組」

##### ①林野高校と MDP 活動

林野高校は、岡山県美作市の中山間地域にある、市で唯一の高校です。「マイ・ドリーム・プロジェクト（MDP）」では学校から地域に出て行くアウトリーチ型の活動を意識しており、地域の課題を発見し、課題解決に向けて活動しています。地域で生徒がアウトプットできる「場」を増やすことで、思考、判断、表現力を向上させ、グローバル人材を育成することを目指すゴールにしています。

##### ②地域とのつながり

MDP 活動では、学年の枠をこえた縦割りのグループによって行います。自分の興味関心によって 10 個のグループに集まった生徒が、さらに計 32 のチームに分かれます。

6 月に地域の方の話を聞く「デアイ場」という活動を設定し、そこから課題を発見し、課題に取り組み、発表するという仕掛けになっています。例えば、「美作市の特産品である黒豆を使った料理を提案する」、「むかし倉敷ふれあい祭りを創造する」というように、グループごとに設定した課題に取り組んでいます。地域には過疎、シャッター街、高齢化などの問題があります。以前、高校は生徒に学力をつけさせて、大学に行かせ、生徒は地元に戻ってこないという声もありました。MDP 活動は今年で 12 年目になり、学校に対する地域の期待はますます高まり、学校に対する要望も多くもらえるようになりました。高校のうちから地元で根ざした活動をさせていきたいと考えています。

また、MDP 活動は「総合的な学習の時間」に位置づけており、年間計画の 1～4 のステップごとに 5 段階のルーブリック（評価指標）をもうけて評価しています。各ステップでのルーブリックは教員も生徒も共有しているものです。また、課題解決への取り組みの前と後に地域の方のアンケートをとって評価しています。課題発見、発表、評価という流れのなかで、高校生のうちに自分の足下の地域の課題に取り組ませたいと考えています。

##### ③課題

MDP 以外にも、林野高校で行っているボランティア活動があり、それを整理しながら計画しています。一方で、生徒の活動が地域から好評で、地域からの学校への要望が増えてきました。教員の人手が足りなくなってきたため、どのように活動を整理していくかということが課題になっています。また、学校設定科目の「美作学」を設定しようとしており、「美作学」の設置も今後の課題になっています。

#### (2) 群馬県立尾瀬高等学校（峯川 浩一先生）

##### 「ボランティア・社会貢献活動につながる取組」

##### ①尾瀬高校の環境

尾瀬高校は校内に水芭蕉が咲く、豊かな自然に囲まれた学校です。尾瀬の草原の中に学校があるわけではありませんが、国内で唯一の自然環境科があり、尾瀬の自然を意識した教育を行っています。全校で 169 名という小規模校で、自然環境棟には黒板がなく、教員が話したことを生徒がメモをとりながら学習しています。また、全国から生徒を受け入れ、生徒は地元の家庭に間借りをして、その家庭の

家族で生徒の面倒を見るという「ハートフルホーム・システム」にも特色があります。

自然環境科では、武尊山の積雪調査を行うなど、自然の中でわきあいあいと共同作業を行っています。

## ②地域活性化プロジェクト

地域に関心を持ち、愛する郷土のために主体的に関わりを持てる生徒を育てることを意図して、総合学習として地域活性化プロジェクトを行っています。将来、地元に残っていく生徒が多く、地域もまたそれを望んでいます。

1年生では地域探検を行います。「近くにあるけど知らないもの」の中から興味のあることを探します。地域サポーターという地元の方に案内して頂き、フィールドノートにメモをして後でまとめます。地域サポーターがどんな案内をするかは教員サイドは全く把握していません。偶然、旅館に連れて行ってもらい、うどんをごちそうになってくるというようなこともあり、人との関わりの中で動機づけをする活動になっています。地元の方も生徒を案内するのが楽しみと、喜んで下さっています。

2年生では自分でテーマを設定して学習します。史跡、スキー場、温泉など自由にテーマを設定しますが、外に出て行くことを基本にしています。外に行く場合は、公共交通機関の使用の他、生徒が朝に調査に行くことを教員に伝え、教員が公用車で連れて行くこともあります。人に会う場合のアポイントも生徒に取らせています。交通の便が悪い反面、ボイスレコーダーが1人1台、デジカメが2人1台～班に1台あるというように設備に恵まれた環境があります。

3年生では研究成果をまとめ、ペンションなどに出向いて発表を行っています。地元の歴史である戸倉戦争や農協や山小屋で販売されているジェラート、沼田市の保育園について調べたり、尾瀬を紹介する漫画を書いたりする生徒もいました。研究成果が片品村のホームページで公開されたり、評価されて大学進学につながったりしたという成果もありました。

## ③課題

活動は担任とプロジェクトチームの4人で計画していますが、実質的には担任がおこなう仕事が多く、教員間の役割分担に課題があります。担任は地域活性化プロジェクトをやるという覚悟でやっていますが、地域との調整、発表場所の確保なども骨の折れる作業です。生徒自身が地域の方からもっと聞き出して研究を進めてほしいというのが本音です。また、一定のレベルに達していない発表もあるということも課題です。

### (3) 東京都立練馬高等学校 (正木 成昭先生)

#### 「地域体験活動と防災教育の取組」

##### ①授業「奉仕」への取り組み

練馬高校は生徒数約700名の学校です。部活動推進指定校と防災教育推進指定校に指定されています。東京都以外からお越しの方は聞き慣れないかもしれませんが、都立高校では「奉仕」という教科を行うことが義務づけられています。教科「奉仕」が始まったときには、多くのメディアに取り上げられ、報道されました。事前学習、体験活動、事後学習という流れで、年間で体験学習を18時間以上行うことになっています。

練馬高校の「奉仕」では、生徒が社会に貢献するということを重視して取り組んでいます。私が、練馬高校に赴任したときにまず始めたのが、所属する教務部での前年度の授業内容の調査でした。もっとたくさん地域貢献させたいという思いから、学校周辺のリサーチを行いました。職員会議で奉仕の意義や活動について多種多様の質問を多くされたこともあり、新しい取り組みを行うことの難しさを肌で感じるが多かったです。繰り返しの議論を経て、新しい取り組みを実施することができ、体験学習で



は、光が丘よさこい祭り、練馬まつり、花いっぱい運動などの体験活動を行いそれがベースとなって今年度も実施する予定です。前任校でも小学校や地域の祭りでの体験活動を行ってきたので、その経験も生かしています。生徒にとって真の実りあるプログラムを提供していくことが奉仕では重要であると思っています。

## ②生徒の変容

これまでの授業から、ボランティアに興味を持ったという生徒がおり、私もそのように実感しています。アンケート結果でも奉仕体験活動の意義を理解していると答えた生徒が体験前に40%であったのが体験後には90%以上になっています。興味を持った生徒を中心にボランティア同好会も立ち上げました。住んでいる地域へのボランティアで、地域について知ろうよということで地域での貢献活動を行っています。

普段から生徒とコミュニケーションをよくとって、特に静かな生徒に気をつけて声をかけるようにしています。今後も部活動、地域の祭り、奉仕体験活動をリンクさせながら発展させていきたいと考えています。

## ③防災一斉体験への取り組み

防災教育については、練馬高校では東日本大震災が起こる前から取り組んでいました。今年度は事前学習で阪神淡路大震災の映像を見せたり、被災地へボランティアに行った方の話を聞いたりした上で、防災一斉体験を実施しました。緊急地震速報体験、安否情報確認体験、避難所開設体験、非常食体験、仮設トイレ設営体験、災害ボランティアセンター体験という6つの体験学習を行いました。生徒の感想には「今回の体験で、自分には何もできない。という考えから、自分にもできることがあるのだ、という考えに変わりました。」というものもありました。高校生は災害時に地域から期待されているということも知ることができ、社会貢献という面でも効果がある活動であったと思います。

## 2. 質疑応答

質問1. 地域での高校生の活躍が求められていますが、その際に「探求」ということがキーワードになると思います。また「共同で学ぶ」ということもキーワードになると思っています。練馬高校は明確に述べていましたが、尾瀬高校、林野高校ではどうでしょうか。

香山先生 生徒指導の根幹として、生徒が助け合う場をふんだん用意しています。4~5人の集団を作り、学び合える、話し合える穏やかな環境があり、それを基盤として地域などに広げていくイメージで行っています。

峯川先生 自然教科の授業はほとんどが共同の学び合いの形態になっています。学科をこえても一緒にグループ活動をしています。グループ活動をしたときは、活動から帰ってきて、班から1人ずつ集まったグループに再構成してそれぞれでやったことを全員で共有しています。

質問2. 学び合いが個人の主体的な学びにつながるという話を聞きましたが、地域の方との学び合いで得られた成果が何かあればデータなど具体的に教えて下さい。

正木先生 地域からは好意的な評価をもらっており、また来てほしいと言われていますが、地域との学び合いという点が今後の課題になっています。

香山先生 林野高校が定員割れしてなくなってしまうたら地域はどうなるのかということ地域に訴

えています。地域は過疎化して、シャッター街になっていて厳しい状況です。学校から地域に出向いていくことで、話し合う機会が増えました。「高校は進学をすすめてきたが、大学に行って地域に帰ってこないじゃないか」というように、大学に行った後に地域に帰ってきてほしいという要望が聞かれます。また、地域には岡山湯郷ベルというなでしこジャパンの宮間選手が所属するチームがあります。女子サッカーという資源を生かして新たな展開が見られてきています。地域からの要望を受けて、学校観を変えるという期待が高まっています。

峯川先生 お年寄りが喜んでることが一番大きいです。高校生が地域について考えているということを知ることが地域の方が知るだけで喜ばれます。学校探検の案内を生きがいのようにしている方もいます。生徒が送ったお礼状に1人1人が返信をくれています。以前は、高校生がうろちょろしていると「何をやっているんだ」と言われていたのが、「また何かやっているな」と思われるようになりました。ただ、地域の方と共同して何か成果を出すということまではしていません。

意見1. 週1回高校生を受け入れていますが、受け入れる側の地域の立場から今日は素晴らしい話を聞きました。ありがとうございました。

峯川先生 協力したいという地域の方は多いですが、教員が及び腰になっている面があります。教員が自分の生活で精一杯で、下地がない中で、教員が地域の方に協力を頂いていくというのはハードルが高いことだと思います。

香山先生 岡山県では学校に地域連携担当を置くことになっています。しかし、活動が広がっていくとその人に仕事が一極集中していくことになります。10個のグループに3～4人の教員を当てて責任を持ち、2名ほどで渉外担当をするという体制を取って、スムーズな連携ができるようになってきました。

正木先生 東京都の場合、「奉仕」という授業はいったいどうなのか、という疑問が教員には少なからずあります。ただ、地域から認められることは生徒も教員もうれしいことですし、学校にとってプラスになっています。昨年、一昨年と担当者はシビアな体験をしました。そこからどう発展させていくということが課題になります。

質問3. シビアな体験を具体的に教えて下さい。

正木先生 職員会議等で多数の反対意見が出されました。その質問や課題に対して、5ヶ月間かけてひとつひとつ同じ分掌の先生と適切に対応しプログラムの見直しをしていきました。

質問4. 私も都立高校の奉仕でのサービスラーニング関わっていますが、最初は教職員の理解が得られずに、校内の「奉仕」の会議に誰も来ないという状況でした。教職員も導入にあたっては大反対をしましたが、決まった以上は内容を取るようになっていっています。早稲田大学や帝京大学の大学生に北園高校、片倉高校に協力してもらいうまくいくようになったと思います。

学びを奉仕としてとらえたときに地域にとってどのようなインパクトがあるのか、を考えるべきです。これまではラーニングに中心があったけれども、今後はそれが第2ステージに

なるのではないのでしょうか。そしてそれを継続していくには連続性と統合がキーワードになると思います。正木先生はよく誉めるなど生徒をよく理解していて、それが継続のためのキーワードになると思いますが、その辺について聞かせて下さい。

正木先生 普段から生徒とコミュニケーションを取るように心がけています。元気な子はこちらもその変化に気づきやすいですが、静かな子の変化に気づけるようにしています。

質問5. 峯川先生の教科は何ですか。学校の組織としてはどのようになされているのですか。

峯川先生 教科は公民です。学校の内情に踏み込まれた質問だと思います。活動は学年のカラーがかなり強く反映されているのが実情です。地域のニーズも変わりますし、自然に築かれている人脈に頼っている面もあります。私自身は担当というわけではありません。今日ここに来ているのは、学年を2周したこともあり一番よく分かっているから行ってこいと言われたからということもあります。

質問6. 岡山県では総合の授業に対して好意的でない考えはありませんか。

香山先生 話を聞いていて東京都のことがよく分かります。岡山県でもそのような学校はあります。林野高校では、2学年の3学期ころになると生徒が大学に行ってこれをしたから勉強するというようになっていきます。進学実績も上がりました。活動内容を武器にして、AO入試や推薦入試で国公立大学にも合格しています。基礎学力もありますし、大学からの評価を得て次の年も大学が取ってくれるという好循環がうまれています。

岡山県では総合が無駄だという意識は変わっているとはいえ、負担は負担であることは事実です。本校は全員が総合を担当するというのが特色で、組織で取り組むということを教員が覚悟している学校です。高校教員は教科の専門があるため、分からないことは教えられないという意識をもってしまいがちではありますが、それで教員と言えるのかということです。教員も共同して学び、間違えるということが総合の醍醐味だと思います。今は、生徒がどこへ行ったかではなく、どこで何をしているのかということに意識が向くようになっていきます。

以上

# 専門学科分科会（まとめ）

## 1. 活動報告

### (1) 愛知県立豊橋工業高等学校（山方 元先生）

（教師になったきっかけ）

高校生のとき、「ベトナム難民・ボートピープルの方々にあなたはどうするのか」と問われた。「自分が直接救援に行くのではなくて、ベトナム難民の問題に関心を持つ人、救援する人を増やすことを自分の仕事にしたい」と答えた。教員となって社会問題の解決をする人を育てたいと考えた。進学後に社会教育分野の「枚方テーゼ」を知り、ボランティア活動を通して市民が育つ教育をしたいと思った。大阪教育大で「青い芝」という脳性マヒ障がい者の自立生活支援の介護活動を経験した。

中山間地の普通科進学校で勤務時、ボランティア活動は受験勉強の妨げとして奨励されなかった。将来の地域を担う人材を育てたくても、大学進学を機に東京や関西へ流出し、その多くは地元に戻らない「ローカルトラック」ができていく。県立高校は市町村とつながりがなく、教員も生徒も高校所在地に関心が薄く、教員のボランティア経験不足から生徒のボランティア活動理解が低い。地域の衰退、社会に無関心な若者に拍車をかける高校の現状に疑問を感じる。

昔は地域でのボランティア活動は福祉分野だった。最近では行政・商工関係者からの依頼が増え、活動内容は人手不足のイベントスタッフなど下請け・補助的な安い労働力であり、依頼側のボランティア理解が低く問題が多い。

ボランティア活動の調査書・内申書評価が定着し、利己的動機のみで現場で混乱を起したり、ボランティア＝偽善の誤解が広まっているのが残念。熱心な教員がいる間、生徒のボランティア活動が活発になるが、教師が転勤すると継続されない。

教員は学校外部からの依頼を待つ受身ではなくて、教員自身が地域に飛び出しボランティア活動に参加し、地域に早くとけこみ、そこから地域の課題を見つけることが大切。また管理職との関わりを大切にして、ボランティア活動への理解を得られる努力もする。

（具体的活動）

東日本大震災被災地を生徒と訪問。愛知に避難している方々との交流活動。

（ボランティアの留意点）

相手を傷つけることもあるため、教員自身の指導観教育観の不断の見直しが必要です。

### (2) 東京都立五日市高校（定時制）（竹田 克己先生）

（奉仕について）

「人の役に立ちたい」と思うことが奉仕

（学校の目標）

「コミュニケーション能力の育成」です。

（地域の様子）

地域は20時にはほとんどの店が閉まってしまいます。

地域には特別養護老人ホームが多く存在します。

- ・1年生で1単位の奉仕の時間

（生徒の特色）

- ・生徒の半数以上、学校生活になじめなかった生徒も多くいる。

（奉仕活動の内容）

介護や防災など、様々な取り組みをしている講師を学校に呼び、講演を開いて奉仕について学ば

せています。

道徳的内容の小話を生徒が読み、それをテープに録音する音訳活動を行っています。作成したテープは地域の特別養護老人ホームに持っていき、夕食の時間などに聞いてもらっています。

11月下旬に立川にある都教職員研修センター、年度末に本校で生徒による体験発表会を行っています。

### (3) 東京都立第五商業高校 (藤田 豊先生・ボランティア部生徒 3年 大澤恵里菜、2年 樽川桃子)

(学校の特徴)

- ・文教都市である国立市に所在し、女子80%を占めています。

(教科「奉仕」について)

- ・東京都設定科目「奉仕」の授業名は「ライフデザイン・社会体験学習」です。

本校では「社会体験学習」は「ボランティア」とは異なるという姿勢で授業を行います。

- ・人とのかかわり、達成感と自信、思いやり、社会のルールやマナーの指導を心がけています。

(授業のねらいの明確化)

- ・担当はチームで行っています。(1学年6人と無担任6人の計12名)
- ・社会体験学習に関する部分は無担任の6人の教員が企画運営をします。
- ・活動先は教員が熱意を持って探しています。
- ・指示を出すことの大切さの共通理解(教師と生徒、受け入れ先)。

何をしたらいいかわからないでいることが生徒の意欲の低さにつながる。

(そのほかのボランティア学習について)

#### ①昨年度の文化祭、2年A組のクラス企画として「東北物産の販売」を実施しました。

- ・菓匠三全「萩の月」、トレボン食品「がんばろう日本サイダー」仙台市  
県立大河原商業高校「うめラムネ」宮城県大河原町  
県立女川高校「ミニ大福」宮城県女川町  
の4品を販売。
- ・販売にあたり、地元の国立市ボランティアセンターの職員の話进行う。
- ・東北出身の写真家の方に、写真の提供をいただき、現地の状況について聞く。
- ・製造者へのインタビューを行う。
- ・体験先にメッセージを届ける。

⇒高校生の底力に関心させられました。生徒たちも、震災のことは気にしているがどう動いていいのかわからない。そこを少し背中を押すことで、ひらめきが広がり、活動につながっていく。生徒の活動が連鎖的に広がっていく、素晴らしい経験をさせていただきました。

#### ②月にボランティア同好会の有志生徒5名とともに、石巻市へ行き、コミュニティー再生のために開催される夏祭り会場の土の中にあるガラス片などの異物の除去をする活動に参加しました。(生徒の感想文を発表させていただきました。)

- ・生徒の発表より

3年生→NPO地域の芽生え21に参加した。報道で知っていたつもりでしたが、実際に現地に行くと、東北の復興はまだかかることがわかりました。一日でしたが、高校生にもできることはあると感じました。今回の経験をもとに、今年の秋の文化祭では、部活動として東北支援の企画を行う予定です。

2年生→夏まつりの会場となる場所は、もともと空き地だと思っていたら、家が建っていたと聞き、驚きました。土の中からガラスがでてきたり、教科書などが出てきました。私たちは、ガレキという言葉で済ませてしまいますが、ここからできたものは、一つ一つもとも持ち主の思い出が詰まってい

るのだなあと考えてしまいました。地元で活動されている方のお話を伺い、ニュースなどで報じられない現実の話がきけてよかったです。自分たちが「何をしたいか」と思うこと考えることが大切だと分かりました。

## 2. 質疑応答(箇条書き)

質問1. 高校の先生は地域との関わりが難しい。教育委員会にしっかりサポートしてほしいが現実はいろいろある。中学校の先生は奉仕の心が強い。

山方先生 学校、教員、事務が受け入れない方もいた。地域が応援して守ってくれた。

竹田先生 奉仕は大事だが、これからは学力向上として、あまり評価されていないのが現状。これからは、人材育成も必要。

藤田先生 地域の核となる人と関わる。関心を持つ。同じ方向を向く。やりたいからやっている。

柳先生 学校の敷居は高い。学校から発信を。芦花では夏6回奉仕体験活動をしている。

質問2. 愛知の実践についてはどうか？

山方先生 現任校ではボランティア同好会を立ちあげ、愛知に避難している方々と交流した。前任校では学校の桜の木を地域に開放して春に花見を行う隣人祭をした。地域が大学生・若者を、若者が高校生を、高校生が小学生に関わるボランティア活動の仕組みづくりを行った。

質問3. 大勢の生徒を動かす際の配慮点は？

藤田先生 自主的活動は難しい。選択科目に分ける(教員の理解は難しいが)。生徒にどれだけ理解してもらえるか、落とし込みが大事。

山方先生 体験する前に生徒に考えさせる。授業等で事前学習を行う。教員一人ではできない。

## 3. 終わりに(東京都奉仕研究会会長)

奉仕やボランティア体験学習は、社会に出たときどうするかを学ぶための場です。

以上